

なんか新しい話

手か足を切断されていたら、構わないことで、打たれた榴散弾や弾も気になっていなかった。ボロボロな体で地雷原の真ん中に落ちていなかったかのよう。ハサンが呻くのを見ていた。

弾が残るだけ討ちつづけていたのだ。どの方向にでもよかった。八方から、弾がやってきていたから。動くどころか、呼吸する力さえも残っていないなかった。サッカーの後に、サッカー場のそばに座っていた時のようだった。友達の汗まみれの顔や喘ぐのを見て、微笑んでいた。尽力を尽くして、呼吸が収まると、唾で手を濡らし、肘や膝の傷に付いた砂を奇麗にしようとしていた。しようとしているだけだった。と言うのは、鋭い痛みを避けるため、傷を触れていなかった。傷の縁を奇麗にするばかりだった。

あそこでも、傷に付いた砂利を奇麗にできなかった。ただクーパーヤヤをも脚の回りに包み、一手と歯で結んだ。クーパーヤヤは血でびしょびしょになって、いよいよ出血が止まった。でもさんの脚から血が流れていなかった。熱い榴散弾が血管の口を燃やしていたから。すりおろされた肉や皮膚が、血や砂利に汚され、破れたズボンを越えていた。彼は後ろの土壌に背を押して、うめき声を挙げていた。治まることはなかった。彼の前に僕が座っていて、我らの左側に通ってきた地雷原だった。

勝負の後に、どれだけ疲労や傷を受けても、泣いてなかったということとはいいところだったな。たとえサッカーをする間に、誰かを殴ったり、押したりをしても、喧嘩をしても、勝負がつくと、疲れたにも関わらず、気分が良かったのだ。帰る道に迷子になってしまうこともなかった。が、ここで、迷子になっていた。一人になってしまっ。いや、一人ではなかった。我らが独りになっていた。僕とハサン。帰る道に、生きている人を見かけたことはなかった。

いきなり弾丸は地と空を火で結び、自分以外何も見えない状況になった。誰もが避難しようと、ある方向へ走った。が、避難するところなん

かどこにもなかった。立っていても、座っていても、同じで、地面か丘の上にも備え付けてある銃の的だった。弾丸は地上一寸のところか頭上から途切れなくやってきていた。僕は溝の迷路を走っていた。この溝からあの溝へ、溝はみんな繋がっていた。蛇のように。足の下に何かあるかどうかでもよかった。砂利、血、死体の柔らかさ、水筒の凸面、また軍需品の空の箱。僕はただ走っていた。と、弾丸は光っている赤い霰のように降っていた。大きいのがあれば、小さいのもあった。土と鉄の欠片が空に跳んで、落ちいていた。何処でも煙や火薬の匂いに溢れていた。

僕はただ走っていた。ボールを追っていた時のように。まるで目を閉じて、二個のレンガの間しかが見えていなかった。ボールを撃つまで何も聞こえていなかった。撃つといつもの外的外れだった。ここでも、溝の両側の壁にしか気を配っていなかった。そして、いよいよ狩られてしまった。弾丸は、一つも脚を、一つも腕を討った。溝の角に落ちた。

彼らは夜明けにやってきた。暁が出たばかりだった。仲間達の体が見えていた。イラク人たちと見分けるのが簡単ではなかった。土が皆を同じく彩っていたから。一人が爆風のアまりに腰まで塹壕の壁に飛び込まれていた。溝の地面に死体が重なっていた。足音が聞こえてきた。うつぶせになって、顔を土に入れた。呼吸できるように、口の前の砂利を退かしたのだ。銃声が聞こえた。一発。彼は二三歩進んできた。二発。足音が近づいてきた。去っていったんだと安堵したところで、振り返ろうとしたが、ざわめく音がした。また体を動かさずにした。半開の目でハサンが見えた。手が足の代わりにになっていた。跳んで、足の残りを前に引っばっていた。僕のそばにつくと、僕はため息をついた。彼はふと後ろに飛び込んだ。

くたくたで汗まみれになった二人が、お互いを見た。「行こう」とハサンが言い出した。

「どこに？」と僕が聞いた。

「後ろに」と彼は言った。

と、家に帰る道が分からないということに気付いた。何処から来たんだろ。夜で、周りが見えていなかった。ハサンは帰る道を知っていると

言った。僕は一手が完全に無感覚になつていて、痛んでも、動いてもせず、不随意に吊っているだけだった。ある殉教者の下からクーフィーヤを拾つて、ハサンに手を首に吊るしてもらつた。彼は先に進んで、僕も彼に沿つていった。昨夜の砲撃の雨はもう終わつていた。奴らは休憩しに行つてたんだろう。休んでいる人はけして少なくなつたのだ。彼らの体は溝の地面に落ちていて。横たわりとうつ伏せのポーズに。埃や砂利に覆われていて。ハサンはたまたま複雑に彼らの間から通つていた。健康な腕で溝の壁に縋つて、一足に凭れ、もう一足を前に引つぱつた。一歩進むと、一瞬、頭の中が空にでもなつたように真っ白になつた。体が軽くなつて、殉教者になつたかなと自分に言い聞かせた。ハサンは寄つて来た。

「どうした？」

「お前は行け」

目を開くと、星が見えた。真っ黒で星に溢れている夜。ある手に水が顔にぶつ掛けられていた。ハサンは行つていなかったのだ。どこから水が入っている水筒を見つけ、夕暮れになつて、涼しくなるのを待つたのだ。そして、僕に意識を取り戻させると、夜になつたという。彼は前に出て、僕が後に沿つて行つた。真っ暗だった。足が絶えずに、何かに引つかかつていた。いよいよ溝の果てに着くと、「どうやって登ろうか？」と聞いた。

一手が首に吊つていて、健康な足を動かすのも苦しかった。銃剣で溝の壁に穴を開けてみた。砂利なんか信用できるわけがない。登ろうとすると、崩れてしまう。ハサンが座つて、背を壁に押しした。彼の肩に足を置き、手で壁の上を掴まえて、登ろうとした。と、激痛が肩、胸や腰を走つた。登つて、塹壕のそばに横たわり、彼の手を掴まえようと手を伸びた。が、手が辿らなかつた。溝に滑るところで、引つ込んだ。

少し溝の中へ傾いた。ハサンは嗚咽していた。なぜかが分からない。僕か自分に哀れんでたのだろう。どちらにしても、千年間も止められた泣きでもいきなり噴出したようだった。

「手を差し伸べろ」と叫んだ。

彼の手を捕まえると、引っぱって、なんとなく彼を溝から出した。胸から泣きが噴き出ていて、彼は母にでも死なれたように悲鳴を上げていた。当然、話せていなかった。声が出ず、息までが詰まってしまおうところだった。彼の耳を精一杯殴った。

僕たちは原の際にいた。ハサンの言葉で言うと、眠っている地雷に溢れている原。僕は、地雷を解除することなんか出来ていなかった。習ったことはなかったもん。「お前は？解除できる？」と彼に聞いた。

彼は先に行つて、僕は後を追った。じゅうけんを地面に刺し込んだり、出したりしていた。土の中から地雷を出すと、毎回も額を地面に置いて泣いていた。止めろと言っても、止めていなかった。やっと地雷原を通った。日が完全に出ていた。ハサンは土壌の重なりに寄りかかって、もう駄目だと言った。僕も彼の前に座った。陽射しが辿ってきていた。

「俺をあそこで放つといっていたら、お前は今ここにいなかったはずだよ」と彼に言った。

「放つとけば、よかった」と彼は言った。

また始め出した。肩が振るえ、涙が頬を覆った埃を分けて、息が胸に詰まったり、出たりしていた。数人の人が僕たちの方へ来ていた。

「いい加減にしろ、ほら、つい見つかったんだ、こっちに向かつてくるぞ」と彼に言った。

「来ないといいな。俺はあいつらに付き合つて行く気はない」と彼は言った。

と、手を使って、地雷原の方に振り返った。僕は飛び込んで、彼の手首を捕まえ、「いったいどうなってしまったんだ、お前は」と怒鳴った。

と、彼は話してくれた。溝の中に、彼に一番近い死体は友人の死体だったんだって。手が僕の手に通るように死体を引っぱって、その上に座ったんだって。穏やかにこの話をしていたのではない。呻いて、嗚咽して、言っていたのだ。足を無くしたにも関わらず。